

高校ラクロス部の創部に関するケーススタディ

Case Studies of the Foundation of High School Lacrosse

1K10C448-9 山口 大貴

主査 木村和彦 先生

副査 作野誠一 先生

【目的】

ラクロスが日本に輸入された 1986 年以降、ラクロスは爆発的に競技人口を増やしてきた。それと同時にメディアにも取り上げられるようになり、知名度も上昇した。しかし現在は高い知名度がある一方で、ラクロス人口は未だに少ない。また実際にラクロスに触れる機会すら少なく、ルールも知らない人が大半である。

そこで自らも選手として取り組んでいるラクロスの普及や発展に寄与したいと思い、ラクロスの競技人口を増やすための示唆をたく、本研究に着手するに至った。競技人口が爆発的に増えていたのは 1990 年代の事である。現に日本ラクロス協会の会員数はここ 10 年間で約 7% しか増加していない (90 年代の 10 年間は約 539% の増加率)。

そのような現代においてラクロスの競技人口を増やす事を考えた時、最も効率の良いのは高校生以下のラクロス競技人口を増やすことであると考えた。その理由は高校ラクロス部の数は大学に比べ圧倒的に少ないためである。男子のラクロス部の数が大学 118 校に対し、高校は 4 校であることから明白である。

このため本研究では、高校ラクロス部創部に至った過程、至らなかった過程を調査し高校ラクロス部の新設のための効率の良い方法を明らかにすることを目的とした。

【仮説】

ラクロスが高校の部活動として普及しない理由には様々なものがあると考ええる。その中でも特に大きな障壁となっているものは 2 点であると仮説した。

まず 1 点目として、ラクロスがルールの分からない未知のスポーツで、かつ危険なスポーツであるために「周囲への理解」が得られないという場合である。次に 2 点目として、指導者や練習場所やないことによる「環境」が整っていないという場合である。

【方法】

実際にラクロス部創部に携わった学校の先生にインタビュー調査を行った。調査対象としては 3 点の観点から選定した。

1 点目は男子ラクロス創部に携わった先生 (調査Ⅰ)。そして 2 点目は女子ラクロス部創部に携わった先生 (調

査Ⅱ)。最後に 3 点目は大学時代にラクロス部に所属して居たが、別スポーツの顧問になった先生 (調査Ⅲ)。この 3 点からインタビュー調査を行った。

調査内容・項目については、作野・清水 (2001) 「地域スポーツクラブの組織形成過程における市町村行政職員の行動とその効果：文部省総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業に着目して」を参考に作成した。

【結果・考察】

まず仮説 1 点目の「周囲への理解」という点について。野球部顧問である小暮は仮説と同じように理解できない立場を示していた。しかし、安全面で納得できる対策を提示すれば容認すると答えている。また実際に高校ラクロス部顧問の開が行っているように、外部のグラウンドや時間外で活動を行う事によって周囲の理解を得る事はできるのである。

次に 2 点目の「環境」という点について。これに関しても小暮は、仮説と同じように理解できない立場を示していた。また、小暮のいる群馬ではよりいっそう仮説通りであると述べていた。しかし、環境のことをネックに考えていたのは男子ラクロス部に対してのみであった。また実際に女子ラクロス部顧問の赤松は未経験でありながらもラクロス協会の助けによりラクロス部創部を実現させている。この「環境」についての仮説は女子ラクロスにおいては当てはまらないのである。

【まとめ】

高校ラクロス普及について、男子ラクロスと女子ラクロスに対し、別々のアプローチをかけ効率的に普及活動を行うべきである。

男子ラクロスは、未だ障壁が多く存在する。そのため無作為に全ての高校にアプローチをかけても効果はうすい。そこで、「東京近郊」「私立」「生徒募集に力を入れている」の 3 つの条件が揃う高校に集中的にアプローチをかけるべきである。

女子ラクロスは、環境が整っている。そのため多くの高校に分散的に「高校ラクロスの整った環境」「用具を揃える負担が少ない」「指導者がいない場合でもラクロス協会がバックアップできる」ことを伝え、普及していくべきである。